

九州方言に与える海の影響

— 日本言語地図を使って —

稲川 順 —

一、はじめに

近年筆者は、四国方言について拙稿「四国方言の分類と位置」(『国文研究』第三十八号・一九九三、以下拙稿B)の中で論じ、九州方言について拙稿「九州方言の統計的研究」(『熊本県立大学文学部紀要』第一巻・通巻四七巻・一九九五、以下拙稿C)の中で論じた。この拙稿Cは「九州方言の分類と位置」(『語文研究』第七十三号・一九九二、以下拙稿A)を改稿したものである。この二論文B・Cは従来論じられてきた方言区画論を、『日本言語地図』を資料としてより客観的に位置づけようという意図によって書いたものであった。しかし私の用いた方法のため、区画論の述べるところの「面と面との境界」というものを明らかにすることはできなかつた。かわりに各地方の都市相互間の言語的な親疎の度合いを、統計計算の手法に回帰分析を利用することにより非常に明確に示すことが出来たと思

われる。

発表の段階で吉岡泰夫氏から、比較の対象にしたのがほとんど各県の県庁所在地をはじめとする代表的な都市であつて、例えば言語変化の少ない郡部の地点などを主に取り上げるべきだといふ御批判をいただいた。これに対しての考え方は、拙稿Cの中で明らかにした。また、取り扱った項目の大部分が語彙項目であり、文法・音韻項目についてはごく少数しか出てこない事についての御批判に対しては拙稿Bでその考え方を述べた。

論文A・B・Cで言及した都市は次の二十一都市である。

九州地方 北九州市、福岡市、佐賀市、長崎市、熊本市、

鹿児島市、宮崎市、大分市

四国地方 松山市、高松市、徳島市、高知市、土佐清水

市

中国地方 下関市、山口市、広島市、岡山市

近畿地方 神戸市、大阪市、和歌山市、京都市

これまで論を進めてきて、いくつかの問題点に気づいたが、特に本稿では海が言語伝播に及ぼす影響について取り上げたいと思う。日本の中でも九州や四国の言葉・方言を取り上げて論じるときは、特に海をはさんでの互いの、また、それぞれの本州との言語交流を抜きにしては論を進めることが出来ないからである。

前述の拙稿の中においても言語伝播に及ぼす海の影響について各項でその都度論じてきたが、本稿では特にそのことに焦点を合わせて論を進めて行きたい。九州地方と四国地方はそのことを考えるにはもっとも好都合であると思われる。

二、九州・中四国の回帰グラフ、九州の回帰グラフ

拙稿C「九州方言の統計的研究」においては、九州の諸都市に中国地方の西部と四国の西部の都市を含めて考察した。

九州地方∥福岡市・北九州市・佐賀市・長崎市・熊本市・

宮崎市・大分市・鹿児島市の八都市を対象

中国地方∥山口市・下関市の二都市を対象

九州地方を論じるときに中国地方と四国地方を含めて論じたので、そこで得られたものと、そのデータから中国地方と四国地方を除いたものとを比較すると、海がどれほ

ど言語の伝播に影響を与えるかを明らかにすることが出来る。と考える。(データは拙稿Cに記載)

右記にあげた九州・中四国十二都市における言語の伝播を表す式は、

$$Y=31.90280+0.04330x \text{ (相関係数 } 0.83215) \text{ ; 式K (注1)}$$

これに対して、右記の諸都市のうち九州の八都市だけを対象にして言語伝播の式を計算すると

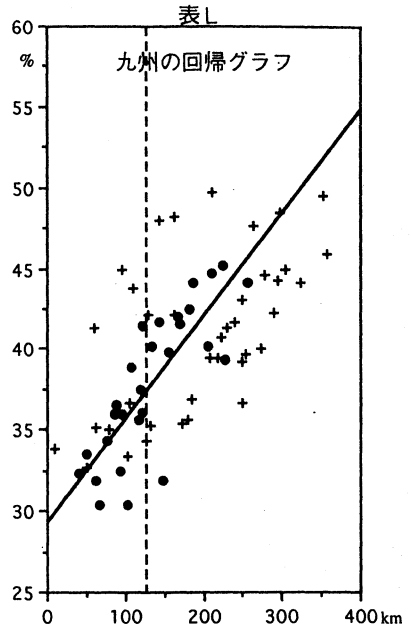
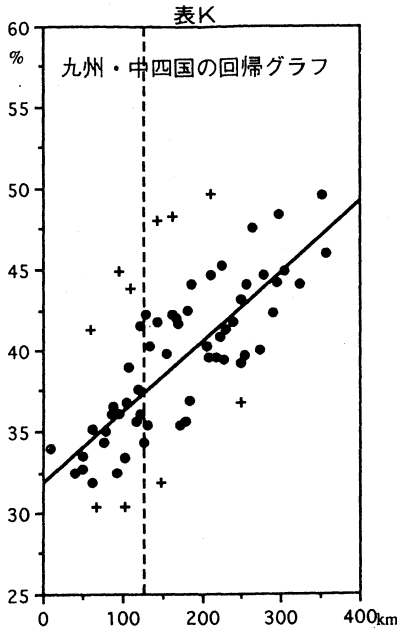
$$Y=29.27080+0.06398x \text{ (相関係数 } 0.803805) \text{ ; 式L (注2)}$$

式K・式Lおよびそれを出すためのデータを、表K「九州・中四国の回帰グラフ」、表L「九州の回帰」グラフで表した。

まず、式 $Y=a+bx$ においてaが大きいほどそれは地理的な要因も含めての歴史的積み重ねとして言語伝播の障害が大きかったことを示し、小さいほどそれが少ないと考えられる。直線の傾きを表わすbの値が大きいほど言語伝播の度合いが悪く、bの値が小さいほど言語伝播の度合いが良いと考えられる。

右の二つの式を較べると次のようなことが言える。

定数aは式Kの方が少し大きく、歴史的に見た場合の九州・中四国両地方と九州地方だけの言語伝播の障害の度合いは、31.90と29.27の差の2.63の分だけ、やや九州内での言語伝播の方が歴史的障害が少なく、間に海が入る九州・中四国



「+」はRの値を上げるために省いたデータを示す 「+」は、中四国のデータで参考のために載せた

両地方での歴史的障害の方がやや大きいという事ができる。
 また係数 b は式Kでは0.04330、式Lでは0.06398でLの方がKより1.478倍(約1.5倍)大きいことから、言語伝播の速さは九州の都市だけの場合より、九州の都市に中四国の都市を含んだグループで考えた方が1.478倍(約1.5倍)早いということになる。

以上から次の如き事が言えよう。式Kと式Lの表す直線の交差するのはxつまり距離が127.27kmの所であるから、二都市間の距離がその値に満たない場合は、陸続きの方が言語の異なりが少ないが、それを越えると、逆に間に海がある方が言語の異なりが少ないということになる。つまりこの場合、二地点が近距離の場合、海は言語伝播の障害になりうるが、ある距離(この場合127.27km)を超えると逆に言語伝播には有利となることを示している。(ただし間に海がある場合いつも同様のことが言えるのかという点も気になる問題である。つまり、あまりに遠距離になるとそれが言えるかどうかという問題も出てくるであろう。また一方、九州の都市間の言語交流があまりないから、海が与えるマイナスの影響が少ないのかもしれない。つまり、場合によってはある一定の距離を過ぎても陸伝いの場合の方が言語の伝播が近距離・遠距離を問わず盛んであることもあるかもしれない。これに関してはそのうち機を改めて

論じることであろう。)

三、九州の各都市を視点として見た九州・中四国の都市の位置

ここではK・Lの式に基づいて各都市を視点としたグラフ1a、8bについて考察して行こう。

凡例

① グラフ上の点線と直線が交わる場所は左右両グラフを重ね合わせたときの二直線の交点である(127.27km地点)。

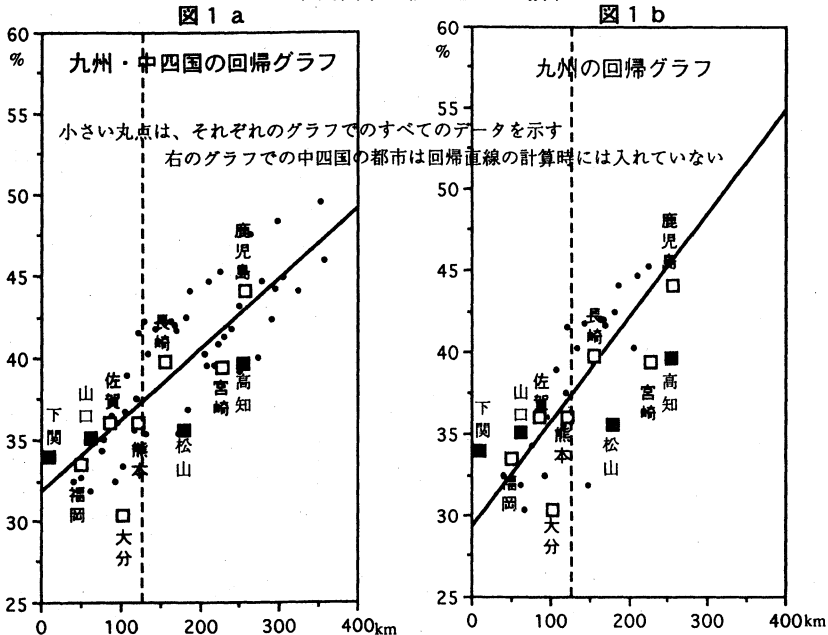
② 交点を中心に上下にのびる点線は各都市が127.27kmより遠距離に位置するか、近距離に位置するかを示すためのものである。

③ この破線より右に位置する都市は「九州の回帰グラフ」の方が視点となる都市に言語的に近く、左に位置する都市は「九州・中四国の回帰グラフ」の方が視点となる都市に言語的に近い。

④ 「九州の回帰グラフ」とは九州の八地点だけでのデータに基づいたグラフである事を指す。参考として中四国の地点も表した。

⑤ 「九州・中四国の回帰グラフ」とは九州の八地点の他に

北九州市を視点とした場合



ゴチで示した都市は九州の都市、それ以外は中四国の都市である

海を隔てた右記の中四国の地点を含んでの計算に基づいたグラフであることを指す。九州の地点は白い四角、四国の地点は黒い四角で表す。

⑥左のグラフは論文Cで示したものの、右のグラフは本稿ではじめて示すものである。

⑦この論文で「言語的に近い」という表現は「直線からのプラスの乖離の度合がより小さい（マイナスの隔離度がより大きい）」ということである。

(一) 図1a・1b、北九州市を視点とした場合

北九州市を視点とした二つのグラフを比較すると次のようなことが言える。

まず、九州地方の都市について。「九州・中四国の回帰グラフ」から「九州の回帰グラフ」に目を移すと、福岡市が直線の上に、鹿児島市は直線の下に相対的な位置が変化する。これは福岡市は中四国を視野に入れると、北九州市とはある程度言語的に近いと言えるが、九州内部だけで考えると、積極的に言語的に近いとは言えないことになる。

一方、佐賀市・長崎市が両グラフともに直線より上に位置することから、福岡市・北九州市二都市は西九州に対するよりも、中四国と言語的に近いと考えた方がいい事を示していると言えよう。大分市・宮崎市も同様に北九州市に近い。熊本市はどちらのグラフで見てもその位置はあまり変

らないことから、北九州市を通しての中市国との影響関係はあまり読みとれない。

縦の破線より左に位置するのは、福岡市・佐賀市・大分市・熊本市で、これらの都市は海のない九州地方だけで考えると、言語上では北九州市から遠くなる。右に位置するのは長崎市・宮崎市・鹿児島市であり、これらの都市は海のない「九州地方」の方が、言語上近くなる。これは二直線の交点(127.27km)より近い都市は海を入れて考える方が直線の傾きが相対的に緩やかなので(言語伝播の早さが早いので)言語的に北九州市に近く、交点より遠い都市は陸だけで考えた方が直線の傾きが相対的に急なので(言語伝播の早さが遅いので)言語的に北九州市に近いということになる。それは九州のデータに海を隔てた中四国のデータを取り入れた方が直線の傾きが緩やかである、つまり、言語伝播の早さが右記のように約1.5倍早いので、交点から右、遠距離になればなるほど、「九州・中四国のグラフ」ではそこに位置する地点は視点とする都市からの言語的距離が遠いのである。

中四国の都市については、当然の事ながら、交点より左に位置する下関市、山口市は左図では言語的に近く、右に位置する松山市、高知市は右図で言語的に近くなる。これは交点までは海が言語伝播の障害になり、交点を越えると

海が逆に言語伝播を促進するということがある。

全体としてみたとき興味深い現象としては次のような点
 があげられる。鹿児島市の方が高知市よりも言葉の異なり
 度が大きい。長崎市・宮崎市よりも遠方に位置する松山市
 が異なり度が小さい。下関市、福岡市、山口市、佐賀市、
 熊本市、松山市の六都市とは似通った異なり度を持ってい
 て、これは北九州がこれらの都市と言語面でほとんど等距
 離にあるということを示す。

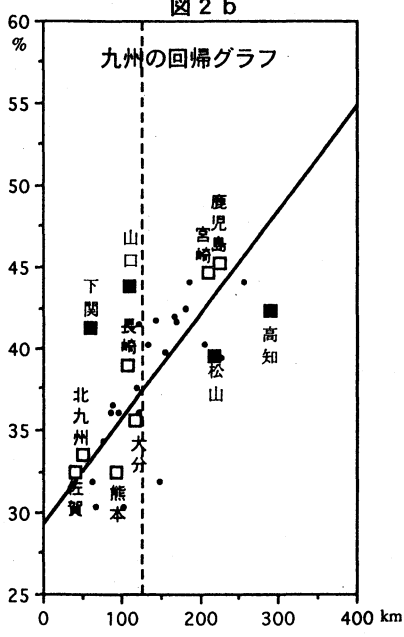
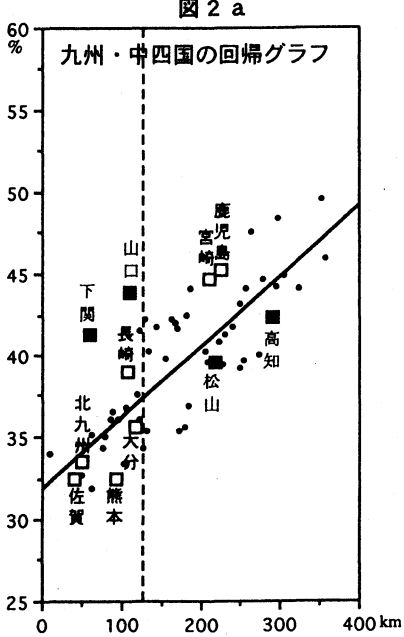
(二) 図2a・2b、福岡市を視点とした場合

九州地方の都市のうち二つのグラフで異なるのはまず佐
 賀市・北九州市が「九州・中四国の回帰グラフ」では直線
 より下に位置するのが、「九州の回帰グラフ」では上に位
 置する事である。これは福岡市を視点としてみた場合は、
 北九州市・佐賀市が中四国とのつながりを考えた方が言語
 面で近いということを表す。熊本市も同様のことが言える。
 長崎市、大分市は交点に近いので、どちらのグラフでも
 あまり変らない。

宮崎市・鹿児島市は九州内だけで考えた方が福岡市と言
 語的に近いということになる。これは二都市の閉鎖性を表
 すといえよう。

中国地方の下関市は交点より左に位置するので間に海を
 入れて考えた方が言語的に近い。山口市はさほどの違いは

福岡市を視点とした場合



ない。

四国地方の松山市、高知市は交点より遠くに位置するの
で九州の中だけ考えた方が言語的に近い。

全体として見たときに興味深い現象はどちらのグラフで
も松山市・高知市が直線より下に位置することである。し
かも宮崎市・鹿児島市・山口市よりも下に位置する（言語
的に近い）。四国の二都市との関係で宮崎市を見ると日
頃の言語感覚とは大いに異なる。長崎市と松山市がほとん
ど同じ異なり度合いであることも面白い現象である。

(三) 図 3a・3b、佐賀市を視点とした場合

福岡市が右の九州内だけを対象とした場合になると直線
より上に移行、佐賀市から見ると福岡市は中四国を視座に入
れたほうが言語的に近いということが出来る。九州の中だ
けで、考えたほうが言語的に遠いのである。これは直線を
境に上下位置が変わることはないけれども、佐賀市から見
た北九州市・長崎市・熊本市も同様なことが言える。佐賀
市からは長崎市がきわめて言語的に近い。距離の上で半分
くらいの福岡市よりも近く、熊本市も福岡市より近く、佐
賀市・熊本市・長崎市を一まとまりとした西九州言語圏と
いうものがうかがえる。

大分市は点線にきわめて近いことからあまりその位置は
変わらない。

宮崎市・鹿児島市は佐賀市との言語の異なり度は大きい

のであるが九州内部だけで見た方が言語的に近い。つまり、
佐賀市とこれら二都市は中四国との関係を考えない方が近
しいということになる。これは宮崎市・鹿児島市自体が言
語的に閉鎖的な土地柄であることに起因しているのだろう。
中国地方の下関市・山口市はどちらのグラフでもそれほ
どの変化はない。四国の松山市・高知市は九州の中だけで
考えた方が言語的に近いと言えるのは九州内の言語伝播立
が悪いことに起因しているのだろう。

全体的に見て、どちらのグラフでも佐賀市はきわめて西
九州の色彩が強い都市と言える。また、興味を引くことは
佐賀市から見ると遠距離にある高知市が相対的にかなり近い
下関市と異なり度がほぼ同一、松山市が中国地方の二都市
よりも言語的に近いということ、四国に対しての言語的
距離が近い点である。

(四) 図 4a・4b、長崎市を視点とした場合

九州の都市で二つのグラフの直線を上下する都市はない
が、熊本市・佐賀市が中四国を考えに入れた方が言語的に
近くなる。福岡市もやや近くなる。ここから長崎市が熊本
市・佐賀市・福岡市を視座に入れるときは、中四国を考え
に入れた方が言語的に近いということになる。北九州市・
鹿児島市・大分市は九州だけで考えた方が近いが、それは

佐賀市を視点とした場合

図 3 a

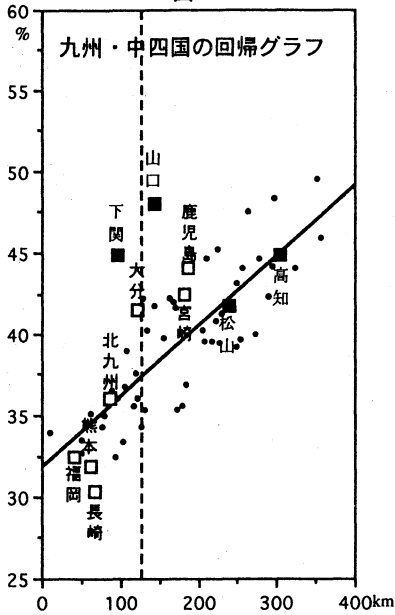
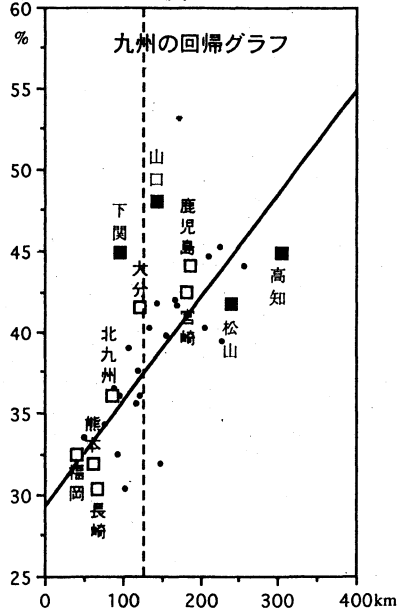


図 3 b



長崎市を視点とした場合

図 4 a

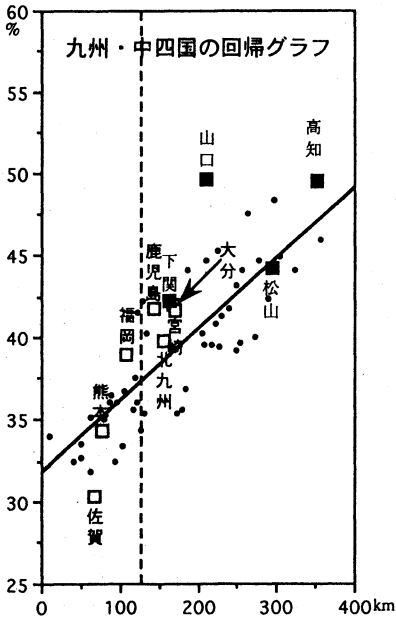
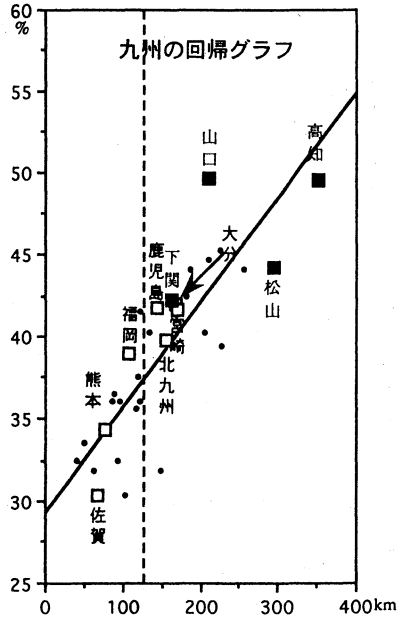


図 4 b



どの違いはない。東九州との関係はあまり直接的ではないことが考えられる。

中国地方の下関市・山口市は直線の上に位置、特に山口市はかなり上方に位置すること、a・b両グラフともに言える。

一方、四国の二都市では松山市はa・b両グラフとも下に位置、高知市は4bのグラフでは直線の下に位置。

右の事からはやはり長崎市でも、中国地方（下関市・山口市）よりも四国地方（松山市・高知市）との言語上の親密さが目立つ。

全体として興味を引くことは佐賀市・松山市を除くと長崎市が言語面でそれほど親しい都市がないということ、九州最西端の都市であることが影響しているのであろう。

(五) 図5a・5b、熊本市を視点とした場合

熊本市の場合その大きな特徴は鹿児島市を除くすべての九州の都市が点線により左に位置していること、これは熊本市は九州の中心に位置しているという地理上の特徴から来ていることである。しかも点線より右に位置する鹿児島市もそのすぐそばに位置して、こういう地理上の性格を持つ都市は他の九州の都市にはない。そういう意味で九州も諸都市に対してきわめて求心的である可能性を持つはずで、実際図5a「九州・中四国の回帰グラフ」上で見ると九州の

ほとんどの都市が直線よりも下に位置する。図5b「九州の回帰グラフ」でも三都市佐賀市・福岡市・北九州市が直線より下に位置、長崎市・大分市・宮崎市がきわめ直線に近く位置することらも、言語上九州の中心的な存在を示すグラフと言えよう。

bのグラフでは直線上の両側にきわめて近く九州の諸都市が位置していることが熊本市の中立的な言語状況を明快に表わしている。

中国地方の山口市・下関市は直線より上に位置、特に山口市は両グラフともに於いてその乖離度が大きく、中国地方との疎遠さを思わせる。

それと較べ松山市・高知市のほうがずいぶんと言語上近い。高知市は特に直線との関係が逆になる。

全体として興味深いことは鹿児島市と距離に於いてははるかに遠い松山市が言葉の相違度においてあまり変わらないことである。

(六) 図6a・6b、大分市を視点とした場合

九州・中四国、九州両方のグラフにおいて、直線を上下するものではなく、交点を中心に各都市が固まって位置している。これはなにを示すかという点、大分市の言語的位置は中四国を入れても入れなくてもそれほど影響はないという点である。これは大分市の地理上の位置が九州の東岸

熊本市を視点とした場合

図 5 a

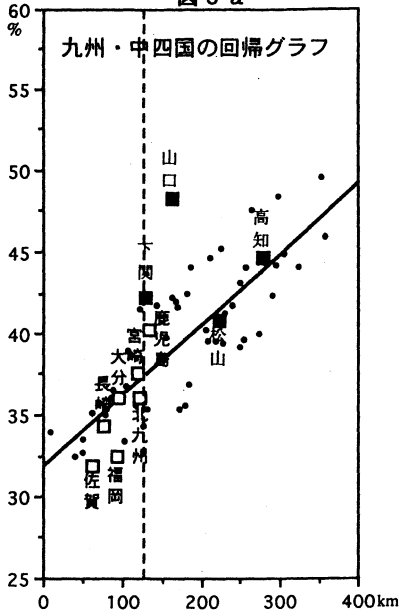
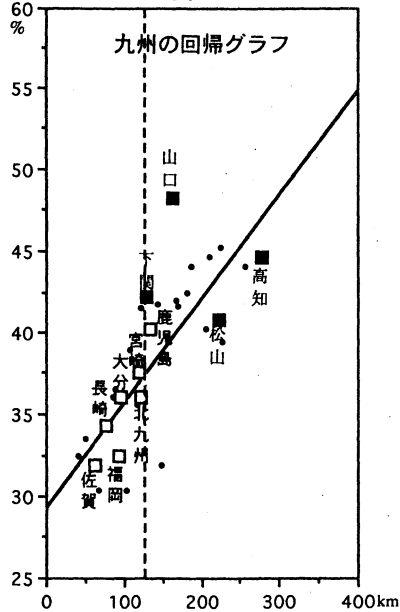


図 5 b



である一方で、海を隔てて中四国の都市と面して、九州中四国のすべての都市に対しその中心として位置していることの反映であろう。言葉もそれに応じてどの中四国の都市とも比較的近いと言える。

言語上特に近いのは北九州市、宮崎市であり、これは大分と同じ東九州の言語圏であることを示すものであろう。言語上遠いものは長崎市・佐賀市で、これはこの二都市が最も西九州の方言の特色を持つ都市であることを示すものであろう。

四国の松山市・高知市はどちらの回帰直線よりも結構下に位置していることから四国との親密性がうかがえる。

中国の下関市とも言語に近い。山口市とも遠いとは言えない。

右のグラフでは鹿児島市が大分市に対しての親密性が増すことから、九州の中だけで考えると鹿児島市が言語上近いと言えるであろう。

(七) 図 7a・7b、宮崎市を視点とした場合

両グラフ全体を見たときの特徴は遠距離に位置する都市に直線より下に位置する都市が多いことである。交点より近くに位置する鹿児島市・熊本市も言葉が近いとは積極的には言えない。

九州の中で積極的に言葉が近いと言えるのは大分市・

北九州市で、特に大分市とは近い間柄といえる。これから宮崎市は東九州言語圏に位置すると言えよう。それ以外の九州の諸都市とはどちらのグラフで見ても言語上近いとは等しく言えない。

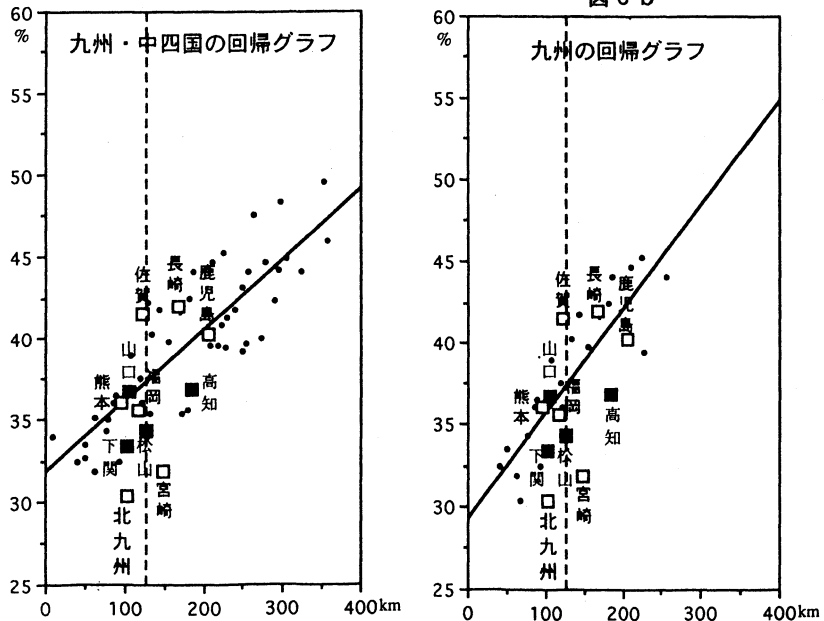
この頃最初に述べたことは特に四国地方の松山市・高知市に言え、このことと右に述べたことから宮崎市は東九州と四国と密接な言語上のつながりを持つと言えよう。

中国地方の山口・下関も右の九州のグラフになると近いと言え、右のグラフには宮崎の言語状況というものが非常に明瞭にできていると言えよう。

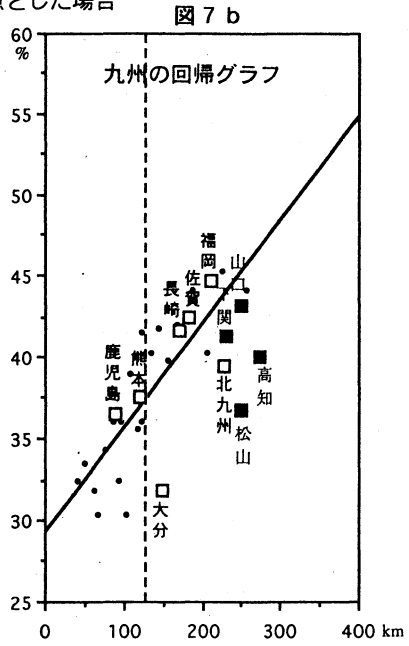
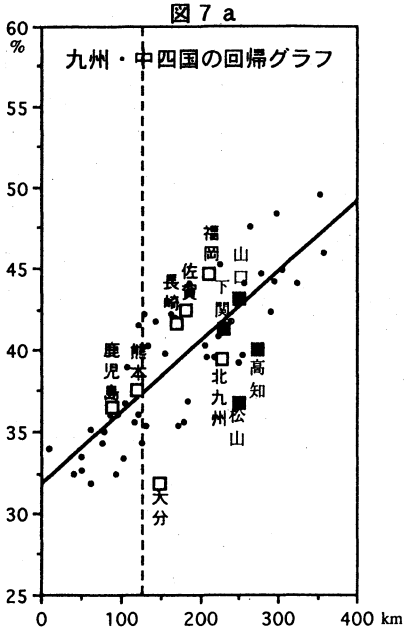
(八) 図 8a・8b、鹿児島市を視点とした場合

左の「九州・中四国の回帰グラフ」では九州の都市で直線しより下に位置するのは大分市だけ、右の「九州の回帰グラフ」では大分市だけで考えた場合は、中四国を考えた場合よりも親密度は小さくなる。これに対して西九州の都市はすべて直線K・Lよりも上方に位置して少なくとも鹿児島市は西九州としての性格は見る事が出来ず、どちらかといえば東九州的な要素を持つといえよう。ただし、北九州にしてもさらに遠い松山市と言語の相違度はほとんど同じ、高知市も直線K・Lより下に位置することから、九州島内を通してのつながりと言うよりも、海を通しての大分市・

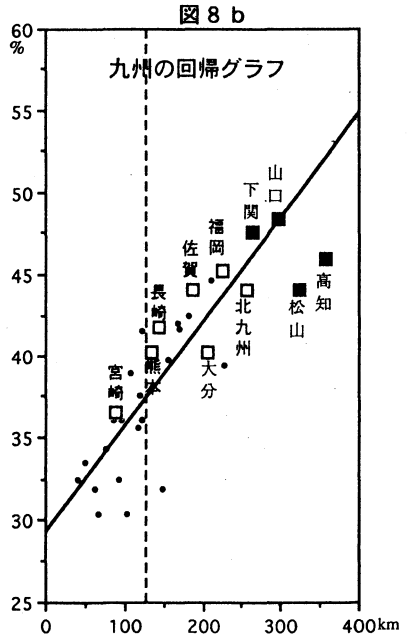
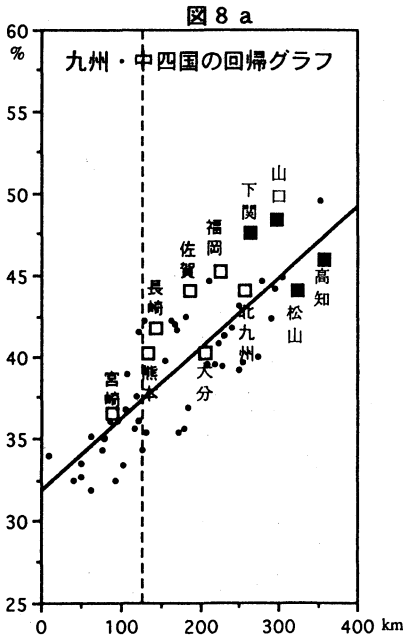
図 6 a 大分市を視点とした場合 図 6 b



宮崎市を視点とした場合



鹿児島市を視点とした場合



北九州市とのつながりと考えた方がいいようである。宮崎市との言語上の位置関係を考えたときそれはさらに実証される。

全体として言えることは、右のグラフで考えると鹿児島市の九州内での独自性・孤立色が見て取れるが、右のグラフで考えるとそれが薄れると言える。つまり海を通じての四国・九州東北部との結びつきが指摘できる。

四、まとめ

本稿は拙稿Cで論の中心となった「九州・中四国の回帰グラフ」に、新たに「九州の回帰グラフ」をつけ加え、両者の比較をすることによって海がいかに言語の伝播に影響を及ぼすかを考えてきた。

まず、二つのグラフの回帰直線を比較することによって次のことが分かった。本稿での地域の場合は言語伝播が早いのは陸上（九州島内）での127.27kmまでであり、それを越えると海を間にはさんだ中国（下関市・山口市）、四国（松山市・高知市）を入れて考えた方が早くなり、その違いは1.478倍、約1.5倍言語伝播の早さが増すことが分かった。

また、九州内だけの八都市で考えると、言語の伝播率（直線の傾き）が悪くなる（大きくなる）ので、127.27kmを離れば離れるほど、「九州・中四国の回帰グラフ」では直線より上にあつた都市が下になつたりして、二つのグラフでは都市の言語上のあり方が異なつてくることが分かった。つまりある地点の言語的な位置というのは、比較の対象にする地点によって、かなり変化するのである。

「九州・中四国の回帰グラフ」で考えていた場合は孤立の度合いが深いとみられた宮崎市・鹿児島市が「九州の回帰グラフ」で考えるとそれほど孤立しているわけではないということが分かった。ただしこれは同じ九州島内での結びつきとはいへ、鹿児島市の場合は海を迂回しての関係だということ、その頃に述べたとおりであろう。

また、九州地方は中国地方（下関市・山口市）とそれほど結びつきがなくて、むしろ四国地方（松山市・高知市）との結びつきが大きいことが九州島内だけのグラフでは際立った。

つまり海はある距離を超えると言語伝播を促進するよう働くということが分かつたわけであるが、本稿でもすでに述べたように、どの地点でもそれが言えるかどうかは後考を待たなければならない。

〈注〉

注1 式Kを算出するために直線からの乖離度±5%以上のデータを示す。

松山・下関市、北九州・松山間、福岡・山口間、福岡・下関間、佐賀・山口間、佐賀・下関間、長崎・佐賀間、熊本・山口間、熊本・下関間、熊本・福岡間、大分・北九州間、宮崎・松山間、宮崎・大分間、鹿児島・下関間、以上十五データ。式Kはそれ以外の五十一データから算出した。

注2 この場合省かれたデータはない。